

第五回シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」

幻の日本万国博覧会―月島の地域学―

日時 二〇〇八年九月二七日(土) 一四:三〇～一八:〇〇
会場 タイムドーム明石 プラネタリウムホール

開会挨拶	陣内秀信	3
趣旨説明	吉見俊哉	4
発表 ① 地域学からみる幻の万博	増山一成	5
発表 ② 勝鬃橋と幻のウォーターフロント計画	伊東孝	15
コメント ① 新ウォーターフロント構想を考える	陣内秀信	21
コメント ② 幻の万博を地域から視る	吉見俊哉	23
質疑応答	増山十伊東十陣内十吉見	25
江戸東京フォーラム話題一覽他		31

フォーラム趣旨

近世から近代への流れを一貫した視点で捉えようと、「江戸東京学」が生まれました。それは東京という地域を深く知る、一種の地域学でもあります。同時に、東京には異なる性格をもつ多くの地域があり、地域の資料館等では熱心な活動が展開され、優れた学芸員等による膨大な研究が蓄積されています。そこで、江戸東京フォーラムでは、「東京の地域学を掘り起こす」というテーマのもとに、シリーズで地域の資料館等の活動を取り上げていきます。

シリーズ第五回、第一七九回の住総研江戸東京フォーラムは、「幻の日本万国博覧会―月島の地域学―」をテーマとしました。

一九四〇年、東京と横浜の湾岸で開催されるはずであった日本初の万国博。会場もプランも決まり、勝鬃橋が架けられ、入場券まで販売されていたこの万博が、開催できなくなっていた経緯については知られています。しかし、この日本初の万博

開会挨拶

法政大学デザイン工学部建築学科教授／
中央区郷土天文館・タイムドーム明石館長

陣内秀信



本日は中央区立郷土天文館・タイムドーム明石にお越しくださいましてありがとうございます。住総研江戸東京フォーラムを私たちの郷土天文館で開催できることを大変うれしく思っております。

この館は二〇〇五年にオープンしました。中央区明石町といえば文明開花の発祥の地です。江戸、つまりは東京の歴史の中心を担ってきたところであり、それらの歴史と文化の厚みを紹介しようという施設です。本日の会場はプラネタリウムですが、社会のニーズに应运えて、こういう施設を複合化させています。都内でも大変人気のある有数の施設です。

この館にはさまざまな常設展があり、ま

た、企画展にも非常に積極的に取り組んでいます。この一〇月一八日からは、文明開化一四〇周年記念の展覧会を行います。「よみがえる文明開化 日本橋・銀座・築地」と銘打ちまして、いろいろな建物の模型をつくったり、オリジナルの図面、写真、絵画などを展示します。そのなかでも一番の目玉は、一八八一（明治一四年、当時は浜離宮にあった迎賓館、延邊館で催された盛大な晩餐会のメニューを復元したものです。都の公文書館にあった資料を当館の学芸員と専門家の方々と解析し、復元しました。このように大変アクティブに、現代のわれわれにも興味深い展示を行っております。

「江戸東京フォーラム」は、江戸東京ブームとちょうど同じ頃、一九八六年にスタートしました。二二年の歴史があります。さまざまな角度から研究会を行い、ときどき大きなシンポジウムを開催してきました。

私たちは、一九八〇年代前半に小木新造氏を中心に提唱された「江戸東京学」を発展させようと活動してきました。東京には江戸時代からいろいろな地域があり、お互いに個性を発揮してひとつの大都市を形成しています。そして、それぞれの地域文

の会場になるはずだった月島（晴海）は、どんな地域だったのか。それは当時の大東京の発展のなかでいかなる役割を担い、万博後にどんな未来像が描かれていたのか。今回は、郷土天文館のプラネタリウムを会場に、幻の日本万国博覧会に夢見られた未来を、月島の地域史の側から眺め直していきます。

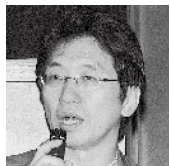
化を掘り起こして展示する博物館もたくさんあります。私たちはそこへ出向いていて、学芸員の方々と研究交流をしながら、もともともと深く掘り下げていこうという地域学をやってきました。そうやって地域を結び、もう一度大きな視野から見直そうというのが「江戸東京学」の試みです。

今回のフォーラムはそのひとつです。当館の文化財指導員として活躍されている増山一成さんが、オリジナル資料を発掘し、非常に意欲的につくられた、幻の日本万国博覧会の映像作品があります。この館の重要な展示なのですが、それをもとに今回のフォーラムは成立しています。

また、本日は博覧会の研究で有名な吉見俊哉先生、勝鬃橋や月島の形成といった土木の歴史に造詣の深い伊東孝先生をお招きしておりますので、大変活発な議論が行われるのではないかと期待しています。

じんない・ひでのぶ

一九四七年福岡県生まれ。東京大学大学院工学系研究科修士。工学博士。イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に留学。著書に『東京の空間人類学（筑摩書房）』、『水の東京（編著、岩波書店）』、『ヴェネツィア―水上の迷宮都市』（講談社）ほか。



皆さまこんにちは。「江戸東京フォーラム」は今回で一七九回目を迎えます。先ほど陣内先生のお話にもありましたが、この種の研究会が二〇年も続くというのは大変なことです。このフォーラムの意義は、この地域、都市の問題を考えようとする、建築、歴史、社会学、あるいは人類学といったさまざまな分野の専門家たちが集まり、共通のテーマについて持続的に議論してきたことです。このフォーラムがそうした活動の先駆けのひとつだったように思います。

さて、本日のテーマは「幻の万国博覧会―月島の地域学―」です。一九四〇年、東京でオリンピックと万博を開催する計画がありました。それが戦争の悪化にともない中止

となった話は皆さまもご存じかと思えます。

すでに政治意志や国家イベントの歴史という方向から、いくつかの研究があり、本も書かれています。メイン会場に予定されていた月島の、地域の視点から万博を見てみようというのが今回の趣旨です。

万博は、月島という地域から見たときにどういう意味を持ちえたのか、開催されなかったことがどういう結果を生んだのか、なぜこの地域で万博が開催されることになったのか、この時代のウォーターフロントの状況はどのようなものだったのか。地域から万博を考えるとこの視点はこれまでもあったのですが、この幻の万国博覧会に関してはなかったように思います。

このテーマについては、増山一成さんにお話しさせていただきます。増山さんは博物館学を専門とされていますが、記録フィルムを使いながらの映像作品をつくられています。あとでご覧いただけます『幻の万国博覧会』という記録作品もそのひとつです。こうした活動と同時に、そのテーマについての調査分析もされていて、その成果が研究として公にされています。

また、万博に絡んだ大きな建造物、なか

でも勝鬃橋については、日本の橋のスペ

シャリストでいらっしやいます伊東孝先生にお話しいただきます。伊東先生は、日本の土木史、とりわけ近代の土木遺産について非常に多くの研究をされています。また、「東京の橋研究会」「勝鬃橋を上げる会」の会長をされています。そうした観点からお話しただけかと思えます。

このお二人の議論をもとに、月島、あるいは中央区、東京の湾岸部から、この幻の万博を捉え直してみたいと思います。

この幻の計画のうち、オリンピックの方は一九六四年の東京オリンピックに受け継がれ、万博は一九七〇年の大阪万博に受け継がれたと言われていますが、どうもそれだけではない部分があります。この月島で開かれるはずであったという意味をもう一度考えてみたいと思います。

よしみ・しゅんや

一九五七年東京生まれ。東京大学相関社会科学部卒業。同大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門は、社会学・メディア研究、文化研究。東大新聞研究所助教授、同社会学情報研究所助教授、教授を経て、同大学院情報学環教授。著書に『都市のドラマトウルギー』『博覧会の政治学』『親米と反米』『ポスト戦後社会』など多数。

発表①

地域学からみる幻の万博

中央区教育委員会主任文化財調査指導員

増山一成



本日は、まず「博覧会と日本の歴史」についてお話ししたあと、「月島の埋立造成と土地利用」に関して、そして「水上の博覧都市構想」、つまり主題である幻に終わった昭和一五年万博の構想、という三本柱でお話を展開したいと思います。

――博覧会と日本の歴史――

日本人が初めて海外の万博を見たとき、これに大変な刺激を受けました。そこで、国内でも内国勸業博覧会を開催してみようという動きが起きました。この内国勸業博覧会の成功で自信をつけた日本は、次に万博を開催しようと考えました。自国での万博開催については、三つのポイントになる

計画があります。明治三二年、明治四五年、そして今回のテーマである昭和一五年です。欧米列強と同列の近代国家日本をアピールするために仕組まれたのがこの三つの計画です。それでは順に追っていきましょう。

まずは文久二（一八六二）年のロンドン万博。ここで、初めてちょんまげ姿の侍が万博を見て驚愕します。次に慶応三（一八六七）年のパリ万博。ここでは、初めて江戸幕府が万博に参加しました。幕府だけではなく、薩摩藩、佐賀藩も同時に参加しています。その後、日本でも、万博とまではいえないけれども、博覧会を開催しようということになりました。手始めに行ったのが、明治五年、湯島聖堂での博覧会です。このあと、明治一〇年から五回にわたって内国勸業博覧会が開かれます。この内国勸業博覧会のあいだに、二度ほど国際的な博覧会の計画が持ち上がります。明治二二年の「亜細亜大博覧会」と、明治四五年の「日本大博覧会」です。「亜細亜大博覧会」は、農商務大臣の西郷従道が発議者で、準備中だった第三回内国勸業博覧会の規模を拡大して実施するプランでした。また、「日本大博覧会」は、西園寺内閣が発表した万博

構想で、代々木から青山の一带で開催することになっていました。ところが、時の情勢や政情不安定のために財政難におちいり、これらは二回とも計画倒れになってしまいました。そして、今回のテーマである昭和初期の万博計画が持ち上がります。震災からの復興を対外的に示して不況を打破する目的で計画されました。

――月島の埋立造成と土地利用――

では、この万博の開催地に予定されていた月島の変遷を見ていきましょう。

月島の埋め立ては、明治一七年、東京府の「東京湾濔筋浚渫事業」から始まります。その後、明治二九年までに、月島一号地、二号地、新佃島までが埋め立てられます。大正二年になると、今度は月島三号地が埋め立てられます。そして昭和六年には月島四号地、のちの万博予定地が埋め立てられるわけです。ちなみに、ここで言う月島とは、いわゆる現在の住居表示上の「月島」ではなくて、あくまでも埋立号地としての月島のことです。

一号地から三号地まで、こうして埋め立てられていくなかで、月島に工場が次々と

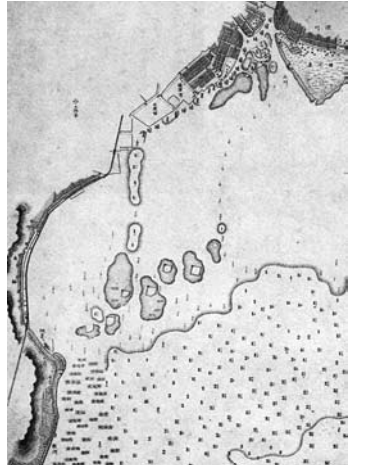


図1 「武蔵国東京海湾図」(明治5)
所蔵：海上保安庁海洋情報部



図2 「参謀本部陸軍部測量局 東京五千分一図」(明治17)
所蔵：財団法人日本地図センター



図3 「日本東京海湾隅田川口附近」(大正8)
所蔵：海上保安庁海洋情報部

進出していきます。その実態については、大正一〇年に内務省保険衛生局から調査報告書が発行されています。工業地帯の月島と労働者の実態をモデルケースとしたもので、近代初の社会調査として注目を浴びました。この報告書は月島図書館にも所蔵されています。

さて、このように膨大な埋立地をつくっていくわけですから、東京市も市債が膨らみ、昭和初期には土地利用についての議論が盛んになります。そうしたなかから、万博開催計画が持ち上がってきたのです。

—— 地図からみる月島の変遷 ——

では、地図でより具体的に、どのように埋め立てられていったのかを見ていきま

砲台がのちの月島埋立の基点になります。

図3は、大正八年の東京湾、隅田川の河口付近が描かれている航海用の海図です。この頃には浚渫事業で造成された土地、月

島一号地、二号地、三号地、新佃島ができあがります。これらの月島地帯が、のちに日本有数の工業地帯となっていくのです。

この頃でも、大川滯、上総滯のあたり以外はどうも船の通る様子が見られません。

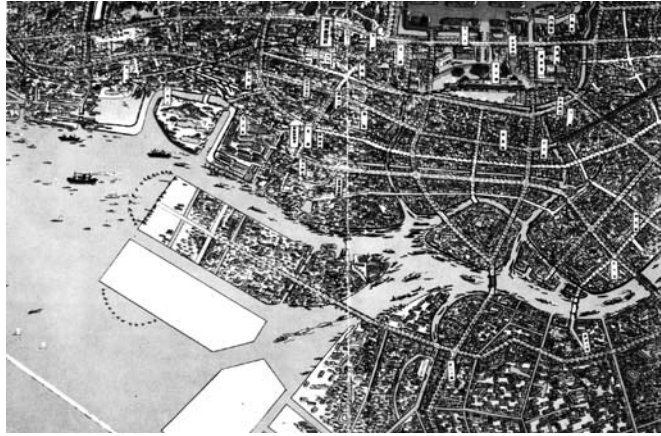


図4 「大東京之鳥瞰図」(昭和7)
所蔵：中央区立月島図書館

しょう。図1は、明治五年の航海用海図

「武蔵国東京海湾図」です。これを見ると一目瞭然で、おびただしい土砂が堆積しているのが分かります。とても大型船が入り込めそうもないですね。ちなみに中央に見えるのが皆さんご存知の「台場」と呼ばれるところですよ。嘉永六(一八五三年、ペリー来航後に建設された)七つの砲台跡です。ずいぶん南に寄っている印象がありますが、堆積土砂がありますので、あまり内地に設けても江戸防衛には意味がないと想定されていたことがわかります。

それでは大きな船、いわゆる千石船のようなものはどこから入っていたのでしょうか。実は、滯筋という、周りより水深の深いところがあって、そこから出入りしてい

まだまだこれから浚渫事業を進めなければならぬところですよ。

—— 日本有数の工業地帯へ ——

続いて、周辺が工業地帯となっていく様子を見ていきたいと思います。大正七年の東京市の様子と周辺の工場分布を示した地図を見ると、大規模な工場が河川沿岸に集中しているのが分かります。特に月島には機械工業が成立していきます。その理由は、水運の便が非常によいということですよ。荷揚げにも便利で、おまけに埋立地なので土地代も安い。敷地も広いので、労働者の住宅用地も確保できる。こういった利点から、工業地帯として発展していきました。

先ほど紹介した内務省による調査も、近代工業の中心であったことから、調査対象地に選ばれたというのがよくわかります。

図4は、昭和七年につくられた「大東京之鳥瞰図」と呼ばれるものです。万博のメイン会場となる月島四号地の晴海と、五号地の豊洲のあたりにはまだなにもありません。なにかほのほとした雰囲気がありますが、実はこの丸い点線は海水浴場のブイなのです。当時はまだ、このあたりも子

ました。大川滯と上総滯という二つの滯筋があつて、そこからしか船が入って来られない状況でした。明治一五年頃には荒川の大洪水が起こり、その影響で台場の沖の方まで土砂が溜まってしまい、船の運航ができない状況が続いたという記録が残っています。このこともあり、明治一七年頃から、滯筋浚渫事業が開始されます。このとき

の滯浚のあげ土でつくられたのが、月島です。この浚渫事業は、明治二二年になると市制・町村制が施行され、東京府から東京市に移管されるようになります。

図2は明治一七年の陸軍による測量図です。佃島の砲台跡が確認できます。台場にある砲台以外で、唯一確認できるのがこの佃島の南端にある砲台です。ちなみにこの

どもたちでにぎわっていました。

—— 埋立事業と万博 ——

このようにして、隅田川河口の浚渫土砂による人工島の造成が進み、膨大な土地ができたわけですが、ここで問題となってきたのが土地の利用です。敷地は百万坪もあり、この土地を工場や倉庫や住宅だけで使い切るのとはとても無理だろうということになりました。また、東京府から東京市へと埋立事業が移ったため、市債もふくれあがり、この市債償還問題を解決する必要があつたわけですよ。

そこで、この膨大な埋立地を利用した事業は何かないだろうかということで持ち上がったのが、国家的イベントを開催し、それを起爆剤にして土地活用の問題を払拭してしまおうという計画です。もちろんこの土地は、貸し付けなどをしていろいろと利用されていたわけですが、国家的イベントを起爆剤にすることで、一気に解決できると考えられたわけですよ。このイベントの一部にオリンピック招致・開催計画があり、東京市庁舎移転・新築の計画があり、そして万国博覧会会場にしようという計画が

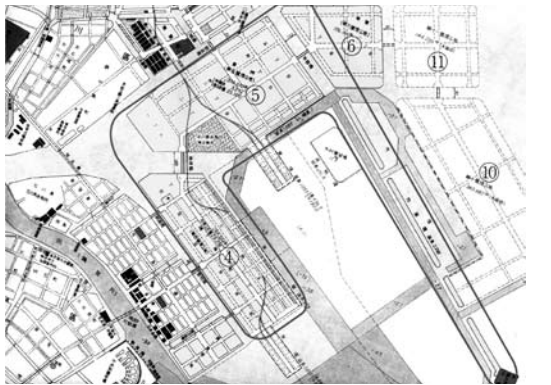


図5 「東京港一覧図」(昭和13)
所蔵：東京都立中央図書館

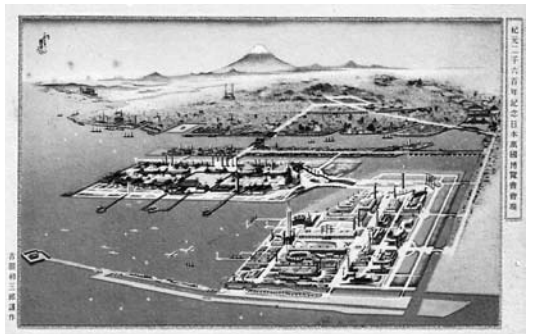


図6 日本万国博覧会会場鳥瞰図 吉田初三郎作
図6-16 所蔵：中央区立月島図書館

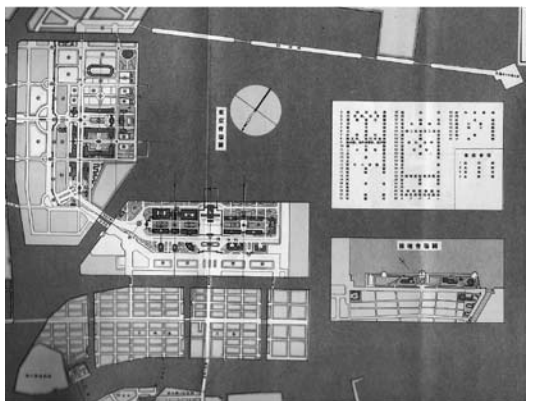


図7 日本万国博覧会会場図

あったわけです。

— 幻の万博へ —

ではこれから具体的に、水上の博覧都市構想、いわゆる幻の万博計画の流れを追っていきましょう。

万博計画の流れを大きく捉えると、四つの時期がポイントとなります。昭和六年、一〇年、一三年、そして一五年です。

まず昭和六年に、国会で万博の建議案が可決されます。しかし、その半年後に満州事件が勃発、国内では五・一五事件も起き、

政情不安定な状況に陥ります。また、海外のことになりますが、昭和八年にシカゴ万博が予定されていたため、その直後では早すぎるといふことになり、昭和一〇年開催の予定は延期されます。

そして昭和一〇年には、万国博覧会協会が「昭和一五年という年は、神武天皇を初代天皇として紀元二六〇〇年の年にあたるとして、万博の開催を発表します。」

しかし、昭和一三年七月、万博の一時延期が決定されてしまいます。戦争の惨禍に巻き込まれてしまい、とうとう三度目の正

直も幻に終わってしまいました。

残念ながら開催はできませんでしたが、計画だけは着々と進められていきましたので、その計画の状況を当時の資料から読み解いていきたいと思います。

— 地図でみる、埋立地での万博構想 —

図5は、昭和一三年発行の「東京港一覧図」の部分です。丸で囲まれている数字は、埋立地の番号です。線で囲まれているのが、月島四号地、五号地です。これが、最終的に決定された万博の開催エリア

です。最初に説明した台場も含めたエリアが万博会場として計画されていました。晴海、豊洲、東雲の一部も含んでおり、約四五万坪(約一五〇万平米)ほどあります。当初は五号地の深川の一区画、六号地、一〇号地、一一号地を含んだ「月島百万坪」というフレーズで計画されていたのですが、最終的には規模が縮小され、四五万坪となりました。もちろんメイン会場は晴海です。

参考までに、東京市庁舎の建設予定地は月島四号地でした。また、オリンピックの開催予定会場は、この地図には載っていませんが、月島七号地、一二号地でした。

続いて図6の鳥瞰図を見てください。ここに描かれているのは、最終的に計画が決まった段階での月島四号地の晴海、月島五号地の豊洲、そして六号地東雲の一部と防波堤、さらに史跡指定の第三台場公園まで含んだエリアです。この作品は鳥瞰図絵師の吉田初三郎作です。万博会場をはじめ、いろいろな場所の鳥瞰図を描いています。最近分かったことなのですが、彼が描いた広島の原爆鳥瞰図が現存している事実を確認しました。「大正の広重」とも呼ばれる大家だけあって、奥には富士山が描かれています。画面上側が西です。少し見にくいのですが、勝鬃橋が跳ね上がっている様子も見られます。なお、万博会場には実に二八の展示館が予定されていました。また小規模ながらも、横浜市中区山下町の山下公園に第二会場が設けられました。ここは本当に小さくて、三万坪(約一〇万平米)ぐらいの小さな会場でした。

の晴海一带に予定されていたのは日本の展示館でした。ドーンと四号地中心奥に構えているのがシンボルパビリオンの「肇国記念館」です。当初の予定では「建国記念館」と称していましたが、同じような意味です。展示館には、生活館、社会館、教育館、経済館、資源館、演芸館、映画館などがあります。対して豊洲は、自由な近代建築による、外国展示館を中心とするエリアでした。日本館を中心とする晴海に対して、外国館を中心とした豊洲は対極にあったわけです。外国館ばかりではなく、農業、林業、化学工業などの産業展示館なども設営される予定でしたが、やはり中心となるのは外国館でした。あくまで見込みですが、参加国として予定されていたのは五八カ国と言われています。

図8は、万博会報誌の表紙から取った図版です。こうしたイメージ画のようなものが会報誌には多数掲載されています。

— 万博のコンセプト —

万博には国際条約というものがありません。「万博」という名称を使うためには、

B I E (The Bureau of International Expositions) と



図8 日本万国博覧会会場イメージ

図7は会場の平面図です。手前の四号地

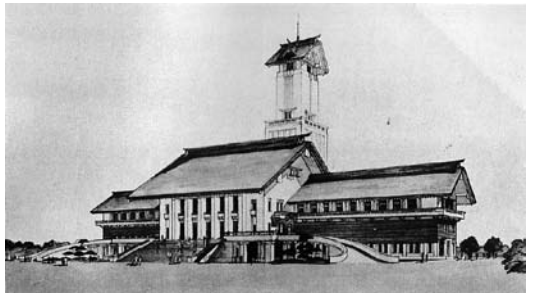


図9 シンボルパビリオン「肇国記念館」一等当選作品
高梨勝重作



図10 「演藝館配置図」四号地(晴海)のパビリオン



図11 「映画館配置図」四号地(晴海)のパビリオン



図12 昭和13年完成「万博事務局棟」

いう、パリに本部のある組織にまず申請し、条約に基づく博覧会であるという許可を得る必要があります。この万博も、実際にBIEへ向けて申請をしている事実がBIE本部に残されている記録から確認できました。

この万博の目的は、「東西文化の融合に資し、世界産業の発展および国際平和の増進に貢献する」という大きなものです。このことは万博計画概要書に明記されている事項です。さて、万博正面のパビリオンですが、朱塗りの柱の回廊型で、神社と寺院

をあわせ持ったようなナショナルリズムが表現されています。寺院風の双塔を建て、その奥に神社風の肇国記念館が建っています。

図9が「肇国記念館」です。これは万博会場の正面にあり、シンボルとなるパビリオンです。迎賓館として建設を予定されてきました。ちなみにこれは建築学会が設計競技(コンペティション)を実施し、佐野利器、武田五一、内田祥三、大熊喜邦といった有名な建築家が審査委員でした。そして一等になったのが高梨勝重氏の作品でした。一等には賞金三千円が用意されていました。

この作品のコンセプトは、「日本の精神の象徴である世界無比なる神社建築」だそうです。まさに神社建築の様式そのもので、住吉造りの様式で設計されています。先ほどの鳥瞰図には塔がありませんでしたが、最終的に塔の部分を取り払われました。実はこの建物は基礎工事まで行われてしま

た。万博の延期で工事は中断されてしまいました。万博の延期で工事は中断されてしまいましたが、いまの晴海大橋のもと、勝鬃橋を渡ったちようどどん詰まりのところになりました。今では晴海大橋も完成しましたので、残念ながら痕跡は残っていないで

しょう。

続いて四号地に計画されていた演芸館について説明します。実際に建てられてはいませんが、図10が残っています。二階建てで、千二百人以上の観客を収容する予定でした。舞台自体は明治座と東京劇場を折衷したようなものを計画していたことが万博会報誌に言及されています。国内外の演劇、舞踏などを一堂に会するという計画だったようです。国内としては松竹、東宝、新橋演舞場などから一流の芸術家を集

めてくる予定でした。演芸館のすぐ隣には図11のような映画館の建設も予定されました。神社建築の様式を思わせる純日本風の建物です。こちらの収容人数は八六〇人ほどを予定していました。上映は、いわゆる市井の映画を見せるというものではなく、あくまで海外から来たお客さまに日本の文化を知ってもらおうという目的の映画で、教育、観光、産業、文化といった内容を上映する予定でした。しかし、実際には計画のみでまったく建設されませんでした。

さて、もうひとつ図12の万博事務局棟ををご紹介します。昭和一三年になりましたが、月島の四号地に実際に建てられました。木造二階建て、屋根は濃い緑の瓦葺き、外壁は一階がクリーム色、二階が白、窓周りは化粧胴梁と柱型が入れられたなかなか立派な建物でした。なぜそこまで詳しく分かるかと言いますと、この建築は大林組が施工したことが分かっているからです。残念ながら図面は残っていないのですが、建築面積は約千五百坪(約五千平米)の大きな建物だったようです。この建物は、万博が中止された後は陸軍の傷病兵の収容所として使用されました。正式名称は、「東

京第一陸軍病院月島分院」です。現在の住所では、晴海三丁目八番になります。建物はその後どうなったのかといいますと、空襲で焼失した、あるいは、GHQが解体した、住民が燃料にするために解体したなどという話が錯綜しております。つきりとは分かりません。しかし、昭和二〇年以降に撮られた米軍の空撮写真にはこの形が確認できます。ですから、昭和二〇年以降も残っていたのではないかと思えます。ただ、この晴海地区は戦後GHQに接収されますので、そのあとGHQによって解体されたのかどうかまでは分かりません。ちなみに、昭和一五年に完成した勝鬃橋の渡り初め式(ぐり初め式)にはこの病院の傷病兵たちが招待されたという話もあります。

当時は図13のような詳細な模型まで完成してました。下が四号地の晴海、上が五号地の豊洲です。この模型は千分の一の詳細模型らしいのですが、会報誌を読み込んでいきますと、全国で巡回展を開催したと書かれています。中央区の銀座三越、松坂屋にも実際に展示されたようです。全国津々浦々、北は北海道から南は九州まで大きなデパートなどを巡回し、遠くは台湾ま



図13 「万博会場模型」下は四号地(晴海) 上は五号地(豊洲)

で行きました。この模型が残っていたら是非この郷土天文館で展示したいのですが、どこへ行ったのやら、戦火のなかで焼失してしまったのかもしれませんが。復元をしたという気持ちにかられる詳細な模型です。先ほど紹介したシンボルパビリオンの壺国館は、今の晴海大橋の袂にあたる場所です。実際に建てられた万博の事務局棟は、いまの日産自動車営業所のあたりです。演芸館、映画館は、トリトンスクウェアの少し北のあたりに計画されていました。

―会場までの交通―

あとに発表される伊東先生が詳しくご説明されると思いますが、会場までの交通について簡単に説明します。

勝鬨橋はシカゴの橋をモデルに日本人が設計施工したもので、ハの字に開き、三トン級の船舶まで航行可能です。この万博は、昭和一五年三月一五日から八月三十一日までを開催期間とし、約百七〇日間で四千五百万人の来場者を想定していました。参考までに申しますと、大阪万博が六千四百万人、万博史上最多の記録となっています。愛知万博が二千二百万人。その

中間といったところででしょうか。この来場人数を計算した経済学者の記事が会報誌に載っているのですが、一時間で最大一〇万人の入場者を計算していたようです。当時の省線電車や建築中の地下鉄銀座線などの伸長も検討されたようですが、結果的にこの勝鬨橋を建設することによって、市電車、海上からの大型船のアクセスも可能になったということです。

―万博の宣伝活動―

図14は、四年後の万博開催に向けて昭和一一年から発行が始まった会報『萬博』です。準備の進捗状況を伝える内容や、海外で開催された万博のレポート記事などが掲載されています。実は、万博の延期後も昭和二〇年ぐらいいまで発行され続けました。昭和一六年の段階で、会報の名が『萬博』ではなく『博展』と変更されました。どこまでやる気なのだろうと調べたところ、昭和一九年の三月、通巻九〇号までは追いかけることができました。その先の百号資料の所在までは確認できていません。後半になればなるほど、その内容が万博というよりは博物館のあり方であったり、展示のあり



図14 昭和11年～昭和13年会報『萬博』表紙

方であったり、まったく関係のない記事になっていきます。

こうして着々と準備が進むなかで宣伝活動も始まります。図15が万博のポスターです。赤い空に富士の峰を白く抜き、手前に黄金の鳶を飛ばせる図案です。長崎のデザイナー中山孝氏の作品です。これがあちこちに張られました。また、社団法人万博協会から、前売りの抽選券付き回数入場券

が発行されました。大人用の入場券が一二枚綴りになっており、これを百万枚発売して万博の資金源に予定していたようです。ちなみに値段が一冊一〇円。賞金は一等が二千円ということですので結構な当選金です。開会まで六回の抽選を予定してありました。ところが初回の昭和一三年の段階で延期が決定されてしまいます。その後どうなったかという、実はそれで中止ではな

く、開催が延期されたあと抽選は予定どおり六回きちつと行われました。なお、昭和四五年の大阪万博、平成一七年の愛知万博でも入場券として通用し、大阪万博では三〇七七枚、愛知万博では九六枚が使われたそうです。



図15 万博ポスター



図16 海外宣伝パンフレット

当然万博ですから、海外にも宣伝します。図16のパンフレットは外国人誘致のために作成されたものです。万博の内容に関してほとんど触れられておらず、日本に来るとおいしいものが食べられるという内容のものばかりでした。また、英語、スペイン語、フランス語といったさまざまなバージョンのリーフレットも確認できました。これらを持って、海外招請使節団がさまざまな国へ行ったようです。ヨーロッパはもちろん、中南米や南太平洋まで行っています。ちなみに日本海軍の巡洋艦「足柄」がこのパンフレット五千部ほどをロンドンまで運んだという記録も残っています。当然これはイギリスだけで配られたものではなくて、イギリスの植民地にも配られたことが分かっています。開催されれば、非常にスケールの大きな万博になっていたのではないのでしょうか。いまでも地球

のどこかに残っているかもしれません。日本万国博覧会の行進曲は、一般から歌詞を公募しました。一等は小学校教師の山口晋一氏で、東京音楽学校が作曲しています。「若き亜細亜の黎明に、生命輝く新日本、みよ悠久を貫ける、日本精神の、その精華、おお絢爛と今開く、日本万国博覧会」などという歌詞です。万博の行進曲決定と同時に、当時の六大レコード会社、ビクター、キング、テイチク、コロンビア、タイヘイ、ポリドールが、専属の一流歌手による吹き込みを行って売り出しました。ちなみにテイチクレコードでは歌手の藤山一郎さんも歌っています。藤山さんは中央区の新堀町のお生まれですので、大変縁が深い方です。

また、当時の横綱であった、武蔵山、男女ノ川、玉錦、双葉山らが万博メイン会場の四号地晴海で地固め式を行いました。角界の力士が地を固めることで、しっかりとここに根付いて、万博が開催されるよう祈願した訳です。こういうことは今ではなかなかありません。さて、こうして地鎮祭も行ったのですが、盧溝橋事件を発端にして日中戦争に突入し、昭和一三年七月には

「後日を期して盛大に挙行する」と、無期延期が決定しました。そして、アジア初の日本万国博覧会は、戦後二五年を経た大阪万博まで待つこととなります。

新しい都市への構想

この月島埋立地は、東京オリンピックや日本初の万国博覧会など、国家的規模のイベント会場として活用されようとしてきましたが、そこには、東京市による新しい都市への構想もあったと考えられます。

これらのイベントで建設した建築群や交通網を利用し、跡地に市庁舎を建設させることで、新しいウォーターフロント開発計画を意図していたのではないかとこのころです。当時の市長である牛塚虎太郎市長も、このことを匂わせるような発言をしていました。ですが、これらはすべて幻に終わってしまいました。

万博がもたらしたもの

この万博がもたらしたものを簡単に整理したいと思います。
一番目に、東京に港が必要ではないかという、東京開港論の高まりがあげられま

す。実際に昭和一六年に東京港が開港されます。戦争の影響であまりふるわなくなってしまうのですが、後の昭和三〇年に晴海埠頭が国際貿易港として完成することになります。そういった高まりを見せました。

二番目に、東京市が国家的イベントを計画し、都市全体を再構成しようという考え方も、ここで出てきたように思います。実際にはあまり機能しなかったのですが、そういった考え方が出たということ自体が大切なのではないのでしょうか。実際に開催されていたら、この晴海がどのように変わっていたのかを想像すると気持ちが高まります。

最後に、この万博を通して、水辺都市の魅力が示され、臨海部の活用が最大限に議論されて計画されたことが重要な点としてあげられます。

実際に市庁舎が建設され、万博も実現し、港湾施設、産業施設を備えた総合的な臨海開発が実現していたとしたら、この地域はどう変わっていたでしょうか。もちろんその後、晴海の国際見本市やモーターショーでの活用が図られました。ですが、昭和一五年の万博が開催されていたら、どんなにこの地域が変わっていたのか、それ

発表②

勝鬨橋と

幻のウォーターフロント計画

日本大学理工学部社会交通工学科教授

伊東孝



本日は、「勝鬨橋」と「ウォーターフロントの幻の四大計画」についてお話ししたいと思います。実は、いつもは勝鬨橋は万国博覧会の入口として設計されたものだと説明しているのですが、今日は若干それを覆して、勝鬨橋は当初の計画では万博を意識していなかったということをお話ししたいと思います。

勝鬨橋の重要文化財指定

勝鬨橋は、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、二〇〇七年六月、国の重要文化財に指定されました。永代橋、清洲橋と一緒に指定されています。重要文化財に指

ばかりが頭に残ります。

補足ですが、二〇一六年東京五輪のメイン会場として舞台となっているのがこのあたりです。これまでの歴史を踏まえた魅力あるウォーターフロント開発で、こうした歴史が何か役立てられないかと私自身は思っています。ただ歴史を追いかけて、こうした過去があったのだというだけではなく、これまでの計画というものをうまくいかした臨海構想に参画できたらというのが私の思いです。

ご静聴ありがとうございます。

「付記」発表の冒頭では、増山氏が二〇〇六年に制作した映像作品「幻の万国博覧会〜月島四号地(晴海)の万博計画とその背景〜」の上映を行いました。

まじやま・かずしげ

法政大学大学院修士課程修了。法政大学文学部博物館学研究室の助手を経て現職。中央区立郷土天文館では「下町に残る念仏踊り〜佃島の盆踊り〜」復元された震災の記録〜関東大震災映画フィルム〜「幻の万国博覧会〜月島四号地(晴海)の万博計画とその背景〜」などの映像作品を制作。関連論文に「宝永七年「佃島沽券絵図控」を読む」、「関東大震災時の火災旋風の発生機構」、「幻の水上市博覧都市月島」など。

定されるには五つの規準がありますが、ひとりで言う、「各時代または類型の典型となるもの」です。永代橋、清洲橋は、この五つの規準のうち、「意匠的に優秀なもの」「技術的に優秀なもの」という理由で指定されました。ところが勝鬨橋の指定理由は「技術的に優秀なもの」だけなのです。なぜ、万国博覧会会場の入口である橋に対して、「意匠的に優秀なもの」という評価がなされなかったのでしょうか。

私は疑問に思ったので、その指定理由を読んでみました。すると、「勝鬨橋は海運と陸運の共用を意図した特殊な構造形式をそなえ、旧態を良好に維持する数少ない可動橋のひとつであるのみならず、我が国で唯一のシカゴ型二葉式跳開橋として貴重である。また可動橋研究で重要な役割を果たした成瀬勝武の設計指導に基づき建設された」と書かれています。実際に設計したのは安宅勝という人物ですが、橋梁技師の成瀬勝武と相談しながら設計したようです。成瀬勝武という人物は、関東大震災後の帝都復興局で橋梁の仕事に従事し、橋梁課の筆頭技師として活躍した人で、聖橋も設計しています。

勝鬨橋の諸元

次に、勝鬨橋がどのようなものだったかを紹介します。全長は二四六メートル。戦前には隅田川で最長の橋でした。戦後になると、より大きな佃大橋が架かります。佃大橋は橋の両端だけでなく、陸地部分まで含みますから、全長が相当長くなっています。勝鬨橋の幅員は二二メートル。可動部分である中央の径間長は四四メートルあります。これは日本橋の橋長と同じ長さです。つまり、日本橋が二つに分かれて開くような大きさです。この長さは、パナマ

指定理由には、さらに「我が国最大の稼働機関を有する大規模でかつ技術的完成度の高い構造物であり、近代可動橋建築の技術的到達点を示した上で重要」と書かれています。結局、同じことしか言っています。文化庁は文献主義なので、意匠的、デザイン的に優れているという記述を文献上確認できなかったから入れなかったのでしょうか。それでも、アーチ部分や可動橋部分のバランスなどを見れば、美やデザインのことを考えた橋であることが分かります。

運河の最小幅員より広く、スエズ運河の幅員の三分の二の広さです。水深が許せば、一万トン級の船が航行することも可能ですが、実際の上限は三千トン級になっています。総工費は四四〇万円。開橋式では、普通は渡り初めをするのですが、くぐり初めをしました。傷病兵たちを菊丸という船に乗せて行ったそうです。

―― 勝関橋の架設経緯 四度目の正直 ――

明治四四年に調査が行われ、大正四年には橋のタイプが決定されましたが、財政難など、さまざまな理由から頓挫してしまいます。計画当初、どのようなタイプの橋が考えられていたかは、まだ文献で確認できておりません。

大正八年、再び橋の計画がもちあがります。このときは、橋桁が上下に動く「昇降式」に決定しました。筑後川下流の筑後川橋梁も同じタイプです。筑後川橋梁は国の重要文化財に指定されていて、いまは歩道橋になっています。可動橋のタイプは大きく三つあります。現在の勝関橋の「跳開式／バスキュール式」、棒磁石が回るような「旋回式」、そして「昇降式」です。ほかに

も、桁を道路に引き込む「引込式」などがありますが、大きくは三つのタイプです。

大正一二年、震災復興事業開始とともに、三度目の勝関橋建設計画が動き出します。しかし、帝都復興事業では新規事業を行わないという方針から、橋の架設は見送られてしまいました。当時の図面を見ると、将来橋が架設されてもいいように、道路は整備されていたことがわかります。

そして昭和五年一二月、東京港修築工事が決まり、その一環として隅田川可動橋、つまり勝関橋が計画されました。可動橋の建設には、昭和七年一月から昭和一五年六月まで、七年半もかかっています。当初の予定は四年だったのですが、戦争が激しくなったこと、そのために鉄などの材料が集まらなくなったこと、そして肝心の労働者が集まらなかつたことなど、さまざまな要因が重なり、大幅に工期が遅れました。しかし、その遅れによって、完成時期が東京万博の開催時期と重なることになり、途中からは、橋の建設を東京万博のスケジュールに合わせるようになっていきました。以上のことから、最初の計画は万博や東京オリンピックの計画とは直接関係な

く始まったと言えます。

―― 勝関橋の工期区分 四期にわたる工事 ――

勝関橋は工期を四期に分けています。当時はまだ船の往来が激しかったために、それを邪魔しないように工事を進めなければなりません。そのなかでも見せ場は、第二期に行われた月島側アーチの架設です。部材が一番重いのはアーチ端部で、その重量は四五トン。石川島播磨重工から船に乗せてここまで持ってきて架設したそうです。当時は地盤のことを心配していたのですが、永代橋、清洲橋よりも地盤がよく、施工しやすかつたといえます。

当時、橋に隣接する月島は埋め立てが進んでいたのですが、勝関橋が架かる前は、月島へ行くには、渡し船を使うか、相生橋まで回らなければなりません。そうした交通の不便もあつたので、なかなか埋立地まで人が行かなかつたようです。土地もあまり売れませんでした。そこで、当時の東京市が考えたのが、橋の建設だったのです。

埋立地の面積は二百万坪(約六千六百平米)あり、坪単価一〇〇円でした。そこに橋が架

かることによって、土地代の値上がりが生じる。坪一〇円上がると二千万円、五〇円上がれば一億円になります。ですから、橋の総工費が二千万円であつてもかまわない、橋の架設費用なんて大したものじゃない、橋の架設費用なんて大したものじゃない、埋立地は計画されていきました。

―― ウォーターフロントの四大計画 ――

次に埋立地の話をしましょう。勝関橋周

辺のウォーターフロント地域には、当時四つのビッグプロジェクトがありました。「東京市庁舎」「万国博覧会会場」「オリンピック競技場」、そして先ほど話しました「勝関橋」です。「飛行場」の予定地にもなつたことがあります。このように、昭和一〇年ごろには、ウォーターフロントは、非常に大きな計画地でした。これらのプロジェクトは幻に終

わつてしまいましたが、唯一実現したのが勝関橋です。

―― 勝関橋計画案の変遷 ――

勝関橋のプランはいくつかあり、固定したアーチ橋を架けるといふ案もありました。可動橋の案だけでも、細かな代替案まで含めると四つほどありました。図1は現在の勝関橋の側面図、図2はタワー付きのプランです。

タワー付きのプランは、一見するとロンドンのタワーブリッジに似ていますが、意識してデザインされたようです。タワーを利用して吊り橋が架けられています。

左下のcは断面図です。かまぼこのような丸い部分を大きく描いたのがeです。川底トンネルになっています。橋が開いているとき、車はエレベーターで降ろすのでしょうか。一方通行になって二本のトンネルで車を走らせ、人も歩けるといふ計画です。排気ガスをどうするか、ということまでは図面からは読み取れませんでした。

タワーブリッジとの違いは、上を通さず、下を通す点です。タワーブリッジでは、わざわざ上にのぼって渡る人は少なく、見

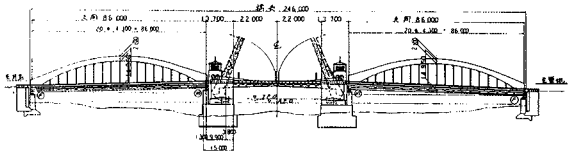


図1 現在の勝関橋側面図

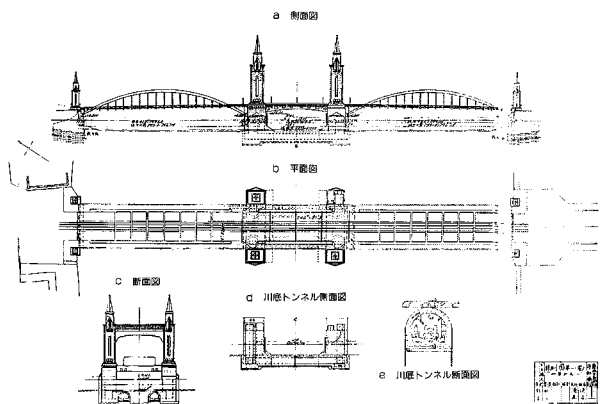


図2 勝関橋代替案(タワー付プラン)

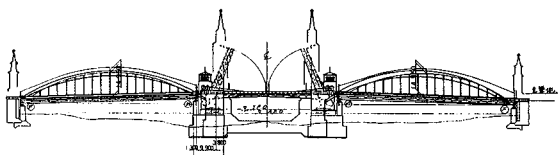


図3 現在の勝関橋と勝関橋代替案(タワー付プラン)の重ね合わせ図

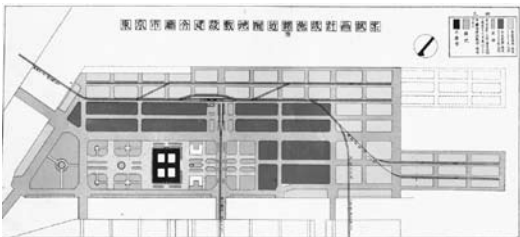


図4 東京市庁舎建設敷地附近諸施設計画試案



図5 東京市埋立地諸施設計画試案



図6 日本万国大博覧会会場配置図

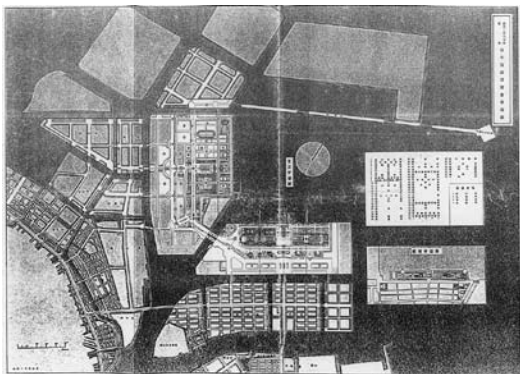


図7 日本万国博覧会会場図(昭和13年2月)

物している人が多い。みんな船が通り終わるのを見えています。ですから、この案が実現しても、地下道を利用する人はいなかったのではないのでしょうか。

このタワーはとても高く、四四メートルあります。当時は、建物の高さには百尺、三一メートルという制限がありました。これには技術的な理由もありました。そういう意味で、もしこれが完成していたら、東京で一番高い建物になっていたはずです。

このプランは現在の形とどう違うので

七年まで六回あり、最終的に晴海地区に決定します。単純なプランではつまらないからと、デザインコンペが開かれました。伊東忠太、武田五一、中條精一郎、佐藤功一と、建築界のそうそうたるメンバーが審査員になっています。万博の建物コンペの一等は三千円でしたが、こちらは賞金一万円。ですから、かなり力を入れていたことが分かります。皆さんご存じの前川國男さんも入選されています。

この市庁舎の計画と同時に、敷地計画と交通計画もなされています。具体的には、五万坪の敷地に、市電、国鉄、地下鉄の計画、道路が含まれています。図5は当時の計画図です。国鉄が臨港線を通して、これが今の京葉線などの先駆けになったと思われる。もちろん市電の延長も考えられていました。当時は地下鉄が浅草から新橋まで開通していたので、新宿からの地下鉄を計画していました。

また、ブルーボール、街路樹のある通りが計画されていました。万博が決まる前ですが、それなりのウォーターフロント計画が、東京市庁舎移転計画とともに立てられていたと言えます。

しょうか。図3のような重ね合わせ図をつくったので紹介します。

実際には可動部のスパンがかなり狭く、また、川底トンネルは、実際の川のラインに土かぶりを設けると、船の通る部分が相当なくなってしまう。可動橋としての機能はかなり落ちることが分かります。大切なのは、われわれ観客の立場からすると、可動橋は開いたときに見栄えがするということ。ですから、現在の可動橋の方がタワー案よりよかったと思います。また、桁の部分がトラスになるなど、若干の

万国博覧会会場

明治二二年の明治万博は延期になりましたが、このとき、アメリカは一五〇万ドルの経費を用意して、三人の事務官を東京に派遣していました(彼らが来たときには無期延期が決定していましたが)。それから昭和万博が計画されました。東京の帝都復興事業が完成したのが昭和五年ですが、それを踏まえて、当時の土木界の大物である古市公威が提案し、昭和六年の三月に国会で可決されました。会場は東京と横浜。「世界文化の浸透と産業の発達。人類の平和」というスローガンのもと、昭和一〇年の完成予定を見込んでいたのですが、これも見送りになりました。昭和一五年の開催がほぼ決定したのが昭和九年で、昭和一〇年に会長職が東京市長から国主宰に変わっていきます。

オリンピック競技場

その次の計画がいわゆる「幻の東京オリンピック」です。これは、昭和五年から永田秀次郎が動いていたのですが、昭和六年に議会で決議し、内外に働きかけようということになりました。昭和一〇年に市長が

変更はありましたが、いろいろな検討の結果、現在の橋の形が採用されました。

東京市庁舎計画

図4は東京市庁舎計画図です。現在の晴海地区の突き当たりには、肇国記念館がありました。昭和五年頃の計画では、このあたり一帯が公園で、商業地を設け、ビルを建て、外国から来る船に対して高層の美を表現するのだという説明がなされていました。

市庁舎の移転計画は、大正六年から昭和

牛塚虎太郎に変わり、彼が海外の新聞記者などを招いてPRしました。

昭和一〇年にムツツリニがローマの招致運動を断念して東京開催を支持します。これが大きな助けとなって、昭和一一年三月、開催を希望していたロンドンもおさえ、最終的にはヘルシンキと決選投票を行い、東京が三六票、ヘルシンキが二七票をえて、東京に決まります。

この東京オリンピックも幻となりましたが、当初は東雲、有明まで計画されていました。図6の右下は横浜会場のプランです。そして図7が正式に決まった案です。横浜でも、最初は埋立地をつくる予定だったのですが、山下公園に手を加えて会場にしようということになりました。

さて、昭和一三年になると、市庁舎計画がなくなりました。公式の話は増山さんがお話しくださいましたが、裏情報では、市長の牛塚虎太郎が東京市議会でいろいろと追及されたことに理由があるようです。彼は、銀座四丁目の服部時計店の娘婿だったのですが、自分の親戚筋の利害関係から市庁舎の計画位置を移動させたのではないかと云われ、そういうことを言われるなら計

の生活のリアリティ、文化がありました。文学者が集まる旅館やホテルもあったようです。

近代の開発が及び、大正から昭和初期にかけては臨海部のあちこちで埋め立てが進み、羽田にかけて工業地帯ができましたが、実は必ず三業地、花街ができました。例えば、保存で話題となった芝浦見番の跡は今でも残っています。ですから、海辺を単純に工業ゾーンにしてしまったのではない都市づくりが、近代のある時点まではあったのです。

また、もうひとつ驚いたのが、昭和一〇年頃にはすでに埋立地が一二号まで含めてできていたということです。これは驚くべきスピードです。最近話題のお台場公園は一三号埋立地で、まだ影もありません

ん。万博の計画は縮小して、結果的には晴海と豊洲になったわけですが、初期には有明まで含めて、いまのお台場公園のすぐそこまで計画がおよんでいます。それも都市空間の開発計画案が示されていました。

この計画は、のちにくる工業ゾーンの計画とは違い、人が住むためのものです。しかも外国からの視点を意識して、美しいものを並べるといった話もありました。昭和一五年ぐらいまでは、建築もデザインも本場にモダンで、アーバンデザインとしても公共施設や公園、橋などを非常に意欲的につくられました。そういう埋立地の構想があったということです。

伊東先生のお話の最後の方に、昭和一五年作成の東京湾臨海工業地帯計画平面図が出てきましたが、このあたりから計画の方

向が工業港湾一辺倒のものに変わったと指摘されていました。まさにその通りだと思います。万博のあったころの計画からは一転して、すっかりそうした構想のない土地利用になってしまいます。東京ガスのエネルギー基地や石川島播磨の大きな造船所ができて、人が住む住宅地は排除されてしまいました。そんな状況のなかで、みんな関心を失ってしまったわけです。

しかしそれがいま、少し戻ってきているように思います。増山さんが最後に指摘されたように、いろんなものを集結して新しい都市空間をつくろうとした当時の思いを評価することは、これからの考えるうえで非常に重要なことではないかと思えます。

コメント②

幻の万博を地域から視る

吉見俊哉

増山さんのお話のなかにもありますが、一九三〇年代は、世界的にはおそらく最後の万博ブームだったと思います。

一八世紀末に始まった博覧会は、一九世紀の中頃には「万博」という巨大イベントに膨れ上がり、二〇世紀初頭まで、最大の国際イベントとしてイベント史のなかに君臨し続けます。日本では、明治一〇年に内閣勸業博覧会が開かれ、それが明治三六年まで続きます。ここまですが万博の第一段階です。国家が主体となって博覧会を開催していた時代です。

これが、明治四〇年代に転換します。自治体や企業が万博に参入してくるのです。明治四〇年の東京勸業博覧会、大正三年の東京産業博覧会、大正一一年の平和記念東京博覧会などがそうです。このように、娯楽的で商業的にも成功する消費指向の博覧

会が広がっていきます。そして地方博のように細かくなりながら昭和初期までブームが続きます。これが第二段階です。

では、幻の万博はこの世界の万博の歴史のなかで見るとどういう位置づけにあるのでしょうか。

一九二〇年代から一九三〇年代というと、比較的万博が多かった時代と言えます。よく知られたものでは、一九二五年のパリ博覧会。これは、アールデコブームのきっかけになりました。一九三三年にはシカゴ万博、一九三七年には再びパリで開かれました。また、BIE公認ではありませんが、一九三九年にはニューヨークで非常に大きな世界博が開かれています。そのほか、一九三二年にはパリで植民地博覧会という文化的にも非常に大きな影響を与えた博覧会が開かれています。

ですから、世界の流れをみても、日本の流れをみても、ここらで万博をやるうというのは自然な考えであったといえます。

もうひとつ付け加えておくと、一九四〇年頃は、世界で一番大きなイベントであった万博が、オリンピックに取って代わられる転換点です。一九三〇年代前半までは、

万博の方が圧倒的に吸引力があったのですが、一九三六年のベルリンオリンピックあたりで立場が逆転します。そのようなこともあって、万博とオリンピックを同時開催しようという野望が生まれたのではないのでしょうか。ですから、本日も話しいただいた、万博とオリンピックの共同開催計画というものは、世界的にみても、日本のなか



でも、非常に考えることの多いテーマであると思います。

さて、これらをふまえたうえで、三点ほどコメントを加えて、あとの議論に引き継ぎたいと思います。

第一点は、もしこの幻の万博が開かれていたら、パリ万博、ニューヨーク万博、シカゴ万博に並ぶようなものになったのかということ。なぜこのようなことを言うかということ、実はいくつか奇妙なことがあるのです。今日見せていただいた資料のうち、神社風の建築がずらっと並んでいる月島の風景がありました。これが非常に変わったのです。それまで、海外の万博に日本が出品する場合には、日本のパビリオンは非常にジャポニズムというか、日本的なエキゾティシズムというか、それこそ神社建築や和風のもを強調し、それに対して、日本で開く博覧会は一転して近代性を象徴するような、非常にモダンな建物を建てて

きました。つまり、海外には日本のエキゾティシズムを強調し、国内に対してはモダンティを強調するという、ある種の二枚舌を使ってきたわけです。

この時代の万博にとって、コロニアリズムはとても重要な要素であり、植民地の展示物をたくさん出展させていました。植民地については、当然ながらエキゾティシズムを強調する展示をさせるわけですが、そうすると、自国の展示との差異化が逆に難しくなってくる。つまり、日本の神社建築的なものを強調すればするほど、西洋から見たときにエキゾチックな日本にしかありません。これはどうということなのか。

第二点は、水辺であることが非常に重視されていきましたが、一方で陸との関係、あるいは西と東との関係で見ますと、戦後になると、東京の中心は西の方へ移ってしまふ。例えば万博や博覧会にしても、まず上野で開催され、のちに代々木や西の方へ行

くのですが、もし、東のウォーターフロントの開発がもう少し違ふかたちであったとすれば、東京の別の未来が描けていたのかという点です。

第三点は、伊東先生や増山さんが何度も言及されてきたことですが、埋め立てのプロセスと博覧会がつくられていくプロセスについてです。ウォーターフロントにおける博覧都市と工業都市の拮抗関係が非常に面白かった。一号地から三号地のいわゆる月島は、工業地区として発展し、京浜工業地帯の核になります。もう一方の晴海は博覧都市として計画されます。その拮抗をどう調整するのか。また、そこに生活の場としての都市という概念は果たしてあったのか。

それぞれが非常に大きなテーマですが、お話をいただければと思います。

ディスカッション

― 幻の万博を動かしていたのは誰か? ―

増山——伊東先生からご提示いただいたお話のなかに、私もずっと考えていることがあります。そのひとつはウォーターフロントの三大計画についてです。昭和初期に、あれだけのウォーターフロント構想がありながら、いつの間にか立ち消えて、何も無くなってしまった。これはいったいどういうことなのか。昭和一三年の段階では、東京臨海部の埋立浚渫事業も明確で、東京市港湾部が作成した東京港図には、埋立地も一号地から一二号地まできちんと図示されている。今の東京湾の地図を見てもあまり変わらないくらいです。そういう状況のなかでオリニピック計画があり、万博計画があり、東京市庁舎の建設計画があり、そして新しい都市を構築しようという議論までされていたにも関わらず、パツタリとなくなってしまったのです。

今この時代に、もっと魅力的な構想を立てるべきだと思うのですが、これについては、ようやく最近になって議論が出てきているところ。とはいえ、吉見先生がご指摘されたように、どうも中心は西の方に移動していて、ウォーターフロント構想がおざりになっていっているように思います。

伊東——これは私の考えなのですが、なぜ昭和一五年以降にウォーターフロント構想の話がなくなってしまったのかということ、いわゆる万博のプランナーが、活躍の場を植民地へ移してしまったからだと思うのです。当時は、満州や朝鮮の方が大規模なプロジェクトがあった。例えば水豊ダムが有名ですが、久保田豊という人は朝鮮でダム建設を行っています。このように、理想的な都市計画、まちづくり、インフラづくりなどは、むしろ植民地で行われていたのです。日本が疲弊してプランナーがいなくなり、その結果、計画が立ち消えになってしまったのではないのでしょうか。

これを踏まえて増山さんに聞きたいことのひとつは、実際にプランニングを行った技術者は誰なのかということです。プランナーの動きと万博を推進したいと思っていた人の動きは違うわけですが、万博推進者が戦後に生き延びたのかどうかということ

旗振り役という意味では藤原銀次郎さんですが、顔も利くし政財界でも人脈が広いという理由で拔擢されただけで、全体のプランに深く関わっていたわけではありません。私も「旗振り役がいなかったのではなか」という気がしてなりません。演芸館にしても映画館にしても、イメージを創り出した人物が見られない。建築家の佐野利器や内田祥三などの名前も、コンペの審議委員に留まるのみで、パビリオンを設計して、主体的に作業に携わった痕跡が残っていません。

——埋立地開発の連続性——

吉見——今のお話は、旗振り役がいなかったにも関わらず、ここまで計画が進んだのはなぜだったのかというお話にも展開できますし、月島ないしウォーターフロントの計画に参与する主体がどのくらいいたのかという問いにも展開できます。

今日はなるべく地域の方に話を向けたいと思いますので、これらに関連して、さらに二つほど会場からの質問を見ていきたいと思えます。

ひとつは、築地在中の方からです。「ずっ

と月島築地地区に住んでおり、大変興味深く話を伺いました。東京港建設計画に関わる埋立地の経緯に関心があります。〇〇号地というナンバリングはどのように進められたのでしょうか。芝浦地区の埋立地計画と連動していたのでしょうか。もうひとつは、「博覧会予定地外の月島一号地から三号地には、当時職工の住宅地があったと認識していますが、万博および五輪計画のなかで、この地域に関する開発、住宅地の計画は検討されたのでしょうか」。この地域全体をどの方向に持つていくつもりだったのかということですね。伊東先生、増山先生いかがでしょうか。

増山——東京湾埋立地のナンバリングに関しては、埋め立てられていった順番ではなかるうかと思えます。東京港の一覧図を見る限りでは、一号地から一三号地まで順番になっています。

陣内——ご質問のなかに、芝浦地区の埋立と連動していたのか、というものがありませんが、芝浦や品川へと埋立地が拡張されていくなかで、このような発想があったかというのは非常に重要な点だと思います。私の考えでは、江戸時代の計画の延長上

にのびていったものについてはナンバリングされていないのかなと思えます。海域のなかに島のように出てくる、ちよつと質の変った近代の埋立地のみナンバリングしたのではないのでしょうか。

東京のベイエリアは世界的に見ても非常に面白くて、近代にできた島が群島になっています。オランダのアムステルダムから来たランドスケープデザイナーのアドリアーン・グーズ(Adriaan Gooze)が見て、「アーキペラゴ(群島)」と言っています。この言葉は、ヨーロッパで特に現在、社会を考えるうえでキーワードになっています。同じ論理で均質化せず、違うものを並べて、それを連結すると面白いものができる、そういう可能性を示唆しています。

増山——豊洲・東雲地区や台場・有明地区と月島・晴海地区はナンバリングされていて、現在の図面を見ても連続性があり、ある意味ではひとつの地域をなしています。けれども、豊洲・東雲は江東区、台場・有明は港区で、月島・晴海は中央区と行政的には切れていますし、統一的な都市像が描かれているかといえばそうでもない。では、明治期から昭和にかけての時代に、そ

ういった都市計画像があったのか。また、ナンバリングしたところまではよかつたけれども、その先に何があつたのか。これが本日のテーマでもあります。万博開催が第一歩だったのでしょうけれども、それがならんかの地域的な将来像のなかに位置付けられていたのかは見えてきません。

伊東——直接的な答えにはならないと思いますが、どういふところが埋め立てられていったかという、実は当時の技術で可能などころから埋め立てていったわけですね。お台場も当然浅瀬のところを選んで埋め立てられています。横浜もどんどん埋め立てられています。東京ほど遠浅ではありませんから、下の地形に合わせて埋め立てられています。運河計画も、基本的には当時

の内務省が権利を握っていて、こういった計画で現在の京浜運河、東京から川崎、横浜が基本的にはできています。

千葉についてはよく確認はしていないのですが、実は千葉側と東京側で比べると、千葉側の海は本当に遠浅で、東京から横浜、横須賀にかけては水深が深い。ですから、横須賀には海軍基地が出来ました。そのような関係を踏まえながら見ていくと、東京湾としての計画が見えてくるのではないのでしょうか。

——埋立地の都市構想——

吉見——伊東先生の紹介された昭和一五年の内務省の計画は、戦後の高度成長期までずっと生きていて、それが規定要因になっていたということですね。そうしますと、基本的には京浜の工業地帯化という流れですよね。これと、万博とオリンピックをやるという博覧都市化の流れとの関係はどのように考えればいいのか。万博、オリンピックがもし開かれていたら、それを転換していく可能性があつたと考えられますか。

増山——月島一号地から三号地に関して、

工業地帯から何か別の目的に転換していく可能性があつたのかと言いますと、それに関しては万博の資料では何ら言及はされていません。ですから、万博が開催されていたとしても、工業地帯からの転換はなかったと思えます。

吉見——本日の発表でも、東京湾を国際港にしていくという流れがまずあつて、そのなかで世界に開かれた万博をやるということになったと言われていましたが、それに関して陣内さんから何かありますでしょうか。

陣内——大変重要なポイントですね。工場をどこへ配置するか、あるいはその労働者の住まいをどう配置するかということには、おそらく大きな戦略があつたのだと思います。そのなかで月島は、まったくのゼロからつくられた土地だということが非常に重要だと思います。江東や深川の運河沿い、隅田川沿いといった場所では分散的にやっていますが、そういった時代の要請を集中的に、そして象徴的にやったというのが月島です。そして、これをまた明解なシステムで実現しているわけです。

しかし先ほども言ったように、水際の空



増山氏

間というものは、工場だけで商業空間あるいは生活空間がまったくないというわけではなくて、いろいろな隙間や海水浴場、教会、料亭などがありました。そういう雰囲気というのは、隅田川の大川端にある料亭のように、必ずしも工場がずらっと並んだ、近代産業を支えるだけの基地というイメージだとは限らなかつたのではないのでしょうか。

先ほど話にあがった橋爪紳也さんの『あつたかもしれない日本』のなかに、大正末年に、中村皐石という能画家が描いた月島のイメージが紹介されています。これを彼に言わせると「東洋のヴェニス」だそうです。つまり、そういうまちづくりを望んでいたというわけです。やはり、ロマンと言いますか、水の都市の持っている面白さというのがあって、単に工場で埋めていくだけではない要素もあつたのではないかと、部分的にですが勝手に想像しています。

それと、やはり時代が巡って、より大きな構想で都市を改造していくというヴィジョンがどんどん出てくるわけです。それはもちろん、藤森照信さんが『明治の東京

計画』岩波書店、二〇〇四）で明らかにしたように、条約改正を有利にしようという銀座の煉瓦街や官庁街の計画もあります。官庁街は上手く行きませんでした。しかし本場に大きな規模で変えていける時代というものは、大正中期の関東大震災以降です。市改正というものは実際には、既存のストラクチャーを少しずつ変えていくということですので、大きな構想はやはり大正末から昭和初期にかけてです。その時代にもう一度可能性を見出す提案が出てきてもおかしくない。その場合に、サンド

イッチのように真ん中におかれた月島がどのようにイメージされていたのか。改良する、あるいはそれにふさわしい空間に変えていくという構想もあつたかと思えます。

伊東——先ほどからお話しになつている、工業地域と港湾地域のイメージなのですが、このあたりは都市計画の範囲ではなくて、用途が指定されてしまえば、もう後は企業が勝手にしていい場所になつていきます。例えば、川崎にはこの工業地帯の中に小さなお店がいろいろあるわけです。ですから、いわゆる都市計画地域と工業地域を一緒に考えない方がいい。むしろ、ある意

見先生から初めに問題提起があつたように、幻の万博では、日本の色が非常によく出ている。特に外国から見るとジャポニズムが色濃く出ている。では、これを恒久的に残そうとしていたのでしょうか。ほかの建物については仮設的な意味合いのものが多くあつたと思いますが、シンボルパビリオンである「肇国記念館」については、恒久的に残す目的で競技設計を実施し、実際に建設が進められました。

——ウォーターフロントの未来——

増山——さて、晴海地区についてですが、昭和一六年に東京港が開港し、昭和三〇年に晴海埠頭が国際貿易港として開港します。しかし、土地の活用方法や利用方法については、あまり考えられていないのではないかと思います。先ほどお話のあつた黎明橋周辺の交通事情に関しても、まったく議論にのぼってきませんし、ほとんど空き地といえますか、建物が建つていません。現在は、一部に清掃工場があり、北の方には大規模なマンションがある程度で、土地の利用に関してはまったく計画的な視点がないなど私は強く思っています。

味では無法地帯のようにも感じてしまう。そういう位置づけも出来るのではないかとお話を聞いていて思いました。

——ウォーターフロントの現在——

吉見——さて、本日のテーマは主に一九三〇年代から四〇年にかけてのお話ですが、この結果は戦後まで繋がっていきます。現代の状況について、会場から質問が来ます。「黎明橋ぎわのマンション再開発に揺れていますが、交通機関がないことをどうお考えでしょうか」。これは現代の晴海、あるいは月島、豊洲一帯の再開発の問題についてですね。

つまり、この時代の幻の万博があり、戦争があり、戦後の占領時代があり、その後の経済成長があり、それらが現代に繋がってくる。ウォーターフロント地区、幻の万博地区の開発計画をいま見返したときに、別の像が見えないか。あるいは今の状況を一九三〇年代の計画との関係でどのようにお考えになれるかということ、ひと言ずつ陣内さんの方からお話しただけだと思います。

陣内——一三号埋立地のお台場公園という

ですから、陣内先生から提起がありましたように、土地利用に関しても、今度のオリンピックも兼ねて、もう少し構想を練っていったらいいのではないかと思います。短期的にそれを捉えるのではなく、長い眼でウォーターフロント地域の計画を考えてほしいと思つています。ビッグサイトも有明に出来てしまつて、晴海の国際見本市の跡地には今は何にもなくなつてしまつている。東京国際展示館は当然残されておらず、あれだけ賑わいを見せた国際的な展示エリアも今では何も活用されていない状況です。ですから、今度のオリンピックのときにも、ただオリンピックを開くということではなく、その地域のその後の展開、運用、そして未来構想まで考えたいという計画してほしいというのが私の願いです。

伊東——私からは二点あります。一点は、インフラについてです。私の発表で、東京市庁舎計画をつくるときの交通計画、敷地計画の話をしました。当時、月島の海沿いには、今のJRの貨物船が入る予定があり、いずれは客船化を考えていたと思います。また、晴海通りには、新宿と新橋から来る地下鉄を入れる予定がありました。



伊東氏

のは面白いんですね。ここは珍しくパブルの頃に都が頑張つて計画をしている。根幹のビジネスセンターは失敗しましたが、逆に自然海浜ビーチは大変な人気で、都の関係者も「いずれは泳げるような質の高い海を取り戻そう」なんて言っています。ところが、豊洲からずつと始まる「間」の空間、これをもっと市民が関心を持つて議論し、今日ここで提起されたような観点を含めて、いい空間をつくらないといけない。今はブラックボックスのように、見えないところであるいろいろと決定されていて、それはそれで、分譲マンションなんかでも人気があるのですが、もつといい工事のやり方が絶対にあるんじゃないかと思つています。

増山——少しだけ万博の話に戻ります。吉

江戸東京フォーラム話題一覧

所属は話題提供時のもの、☆印は地域見学会も実施

1986年(研究会)

第1回	江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供	小 木 新 造	歴史民俗博物館
第2回	都市下層社会の形成と変容	内 田 雄 造	東洋大学
第3回	やわらかい都市構造	陣 内 秀 信	法政大学
第4回	考現学の考古学	佐 藤 健 二	法政大学
第5回	明治期の道路(街区)・路地の幅員基準について	石 田 頼 房	東京都立大学

1987年(研究会)

第6回	博覧会と盛り場の明治	吉 見 俊 哉	東京大学
第7回	明治期の繁華街の建築	初 田 亨	工学院大学
第8回	東京の土地・住宅史	長谷川徳之輔	建設経済研究所
第9回	江戸の構成と構造	加 藤 貴	北区教育委員会

1987年(公開研究フォーラム)

第10回	水の都・深川成立史	吉 原 健 一 郎	成城大学
第11回	江戸の建築技術	西 和 夫	神奈川大学
第12回	松浦武一郎の一畳敷の書齋	ヘンリー・スミス	コロンビア大学
第13回	徳川の旧家臣のみた、江戸・東京	井 上 勲	学習院大学
第14回	路上から見た江戸・東京	藤 森 照 信	東京大学
第15回	東京書物探索入門	大 串 夏 身	都立中央図書館
第16回	神田のサウンド・スケープの研究	鳥 越 け い 子	法政大学

1988年(公開研究フォーラム)

第17回	絵画史料にみる江戸の町	波 多 野 純	日本工業大学
第18回	明治期東京の飲料水販売	松 平 康 夫	東京都公文書館
第19回	江戸城御殿の室内空間について—障壁画下絵による復原—	西 和 夫	神奈川大学
第20回	小江戸・川越のまちとすまい	内 田 雄 造	東洋大学
第21回	現代東京の祝祭	松 平 誠	立教大学
第22回	丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住	岡 本 哲 志	岡本都市建築研究所
第23回	浅草寺の境内・門前世界	竹 内 誠	東京学芸大学
第24回	都心定住を考える—市街地の「町」の現代的意味—	奥 田 道 大	立教大学
第25回	都市社会調査の歴史から	佐 藤 健 二	法政大学
第26回	世界都市東京の光と影	町 村 敬 志	筑波大学

1989年(公開研究フォーラム)

第27回	都市の語り出す物語	宮 田 登	筑波大学
第28回	江戸の都市計画—江戸前島を中心として—	鈴 木 理 生	区立京橋図書館
第29回	江戸の武家屋敷について	北 原 糸 子	
第30回	江戸の被差別・東京の被差別—もうひとつの江戸・東京—	大 串 夏 身	都立中央図書館
第31回	江戸東京の遊び—かるたを中心に—	村 井 省 三	村井かるた館
第32回	森鷗外の都市論	石 田 頼 房	東京都立大学
第33回	東京都心部における空間利用形態	山 下 宗 利	筑波大学

このように、月島の背骨としての交通機関が計画されていたことから、インフラの整備に関しては考えられていたのではないかと思います。

二点目は、将来に向けて何をすべきかです。これは僕にとってはたったひとりでいい。「勝鬨橋を上げよう」(笑)。勝鬨橋がオリンピックの入口になる予定が叶いませんでしたので、今度はそれを目標にして、二〇一六年の東京オリンピックを迎えようというのが趣旨です。

吉見——私からもコメントと、まとめの言葉を付け加えさせていただきたいと思えます。今日出てきていない話に軍事についてがあります。工場の話、祝祭の話は出てきますが、東京のこういった大規模用地を考えるうえでは、軍事のことも重要です。先ほどの話で、晴海の建物がどうなっってしまったのか分からないというのは、恐らく占領期が関係していると思います。湾岸部は横浜に至るまで、米軍にすべて接収されますから、その時代に何が行われていたのかはよく分かりません。それから、一九六四年に東京オリンピックが開かれま

すが、オリンピック用地の多くは、戦前には陸軍用地で、それがアメリカ軍に接収され、オリンピック用地となっていくという経緯をたどります。こういう事例が非常に多い。都市における軍事的な問題というのは、まだなかなか論じられていないテーマで、今日のテーマとも絡む問題だと考えています。

今日のお話は大変刺激的な報告で、しかも新しい発見がたくさんありました。私も面白いと思ったのは、月島、晴海、豊洲が全部つながって海を囲っていることです。先ほど陣内さんがアーキペラゴ(群島)の話がされていましたが、潜在的な可能性を秘めている地域です。

ただ、一体この地域を誰がつくるのか、誰のためにつくるのかは、一九三〇年代から現在に至るまで、空白のままです。これは日本社会が非常に苦手としていることですが、こういう場が、議論を触発していくひとつのきっかけになれば幸いです。

まだまだ時間は足りませんが、これにて終わります。最後までご清聴いただきありがとうございます。



第 68 回 都市のまつり 宮 田 登 筑波大学

1993 年(公開研究フォーラム)

- 第 69 回 江戸、初期の土地問題 吉原健一郎 成城大文学
第 70 回 江戸勤番武士の生活 竹内誠 東京学芸大学
第 71 回 江戸のおんな 杉浦日向子 江戸風俗研究会
第 72 回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合— 加藤仁美 跡見学園短大
第 73 回 新説・日本近代住宅史 藤森照信 東京大学生研
第 74 回 幻の東京オリンピックと万博 磯村英一 東京都立大学
第 75 回 東京市社会局と都市社会調査 佐藤健二 法政大学
第 76 回 近代における東京の都市庶民住居の発展 江面嗣人 文化庁文化財
第 77 回 江戸の町と京都の町 小川保 清水建設(株)技研
第 78 回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる— 伊藤毅 東京大学
第 79 回 谷中墓地をめぐる 森まゆみ 谷根千工房

1994 年(公開研究フォーラム)

- 第 80 回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地— 八木澤壮一 東京電機大学
第 81 回 葬式のフォークロア 宮田登 筑波大学
第 82 回 東京—極集中と今後の課題—より豊かな都市空間をめざして— 東郷尚武 東京市政調査会
第 83 回 東京都政の 50 年 大串夏身 昭和女子大短大
第 84 回 博物館の住宅展示を考えて—人々は生活史をどうみるか— ジョルダン・サンド
第 85 回 都市空間とセクシュアリティ 上野千鶴子 東京大学
第 86 回 メディアとしての絵はがき 佐藤健二 法政大学
第 87 回 メキシコシティと東京の間で 吉見俊哉 東大社会情報研
第 88 回 北京と東京の比較都市論—歴史的空間構造と近代化のメカニズム— 陣内秀信 法政大学
第 89 回 川越のまちなみの復元 内田雄造 東洋大学
浅井賢治 東洋大学
第 90 回 河鍋暁斎と江戸東京 小木新造 江戸東京歴史財団

1995 年(公開研究フォーラム)

- 第 91 回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本— 小澤弘 調布学園女子短大
第 92 回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺 丸山伸彦 歴史民俗博物館
第 93 回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料 天野隆子
第 94 回 歌謡曲のなかの東京 大串夏身 昭和女子大短大
第 95 回 江戸の着物文化 田中優子 法政大学
第 96 回 江戸東京学への招待試論 小木新造 江戸東京博物館
第 97 回 「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説— 伊藤毅 東京大学
第 98 回 盛り場考 神崎宣武
第 99 回 近世都市空間の創出過程について—都市構築の基盤材調達の見点から— 北原糸子
第 100 回 江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間— 小木新造 江戸東京博物館
陣内秀信 法政大学
高階秀爾 国立西洋美術館

第 34 回 「響き」としての東京の街なみ—神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に— 鳥越けい子 サウンドスケープデザイン

第 35 回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題 奥田道大 立教大学

1990 年(公開研究フォーラム)

- 第 36 回 鶴屋南北の幽霊 横山泰子 国際基督教大学
第 37 回 東京と近代詩 行吉正一 江戸東京博物館
第 38 回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる—マンションの老朽化と建て替え問題— 内田雄造 東洋大学
第 39 回 東京の地価 前田尚美 東洋大学
第 40 回 江戸の地価 伊藤好一 関東近代史研究者
第 41 回 江戸のごみ処理 伊藤好一 関東近代史研究者
第 42 回 都市農業と土地問題 石田頼房 東京都立大学
第 43 回 天皇巡幸と「帝都」としての東京 吉見俊哉 東大新聞研究所
第 44 回 江戸の名所・王子 加藤貴 北区教育委員会
第 45 回 上水からみた江戸の都市計画 波多野純 日本工業大学
第 46 回 江戸名所絵における遠近法 ヘンリー・スミス コロンビア大学

1991 年(公開研究フォーラム)

- 第 47 回 江戸凶屏風にあらわれた風俗 丸山伸彦 歴史民俗博物館
第 48 回 鍬形蕙斎の江戸一目凶屏風 小澤弘 調布学園女子短大
第 49 回 見立絵というもの 鈴木重三
第 50 回 江戸住宅事情 片倉比佐子 東京都公文書館
第 51 回 江戸・明治・大正のすまい 平井聖 昭和女子大学
第 52 回 最近の自治体住宅政策について 林泰義 計画技術研究所
第 53 回 東京市営住宅事業について 内田青蔵 東工大附属高校
第 54 回 東京における水際土地利用の変容—日本橋川と隅田川を中心として— 岡本哲志 岡本都市建築研究所
第 55 回 江戸から東京への景観構造変化 窪田陽一 埼玉大学
第 56 回 東京都の都市計画と河川運河 昌子住江 関東学院大学
第 57 回 アジアのスラムと居住へのたたかい 内田雄造 東洋大学

1992 年(公開研究フォーラム)

- 第 58 回 新宿ヤミ市の復元 松平誠 立教大学
第 59 回 鍬形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる 小澤弘 調布学園女子短大
第 60 回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる— 小木新造 江戸東京歴史財団
第 61 回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動 鈴木栄一 千代田区議員
第 62 回 近代演劇人による伝統の発見 横山泰子 国際基督教大学
第 63 回 博覧都市江戸東京 吉見俊哉 東大新聞研究所
第 64 回 読売から新聞まで GERALD GROEMER
第 65 回 音の風景と近代の忘れもの—大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる— 鳥越けい子 サウンドスケープ機構
第 66 回 三越百貨店が演出した文化生活 初田亨 工学院大学
第 67 回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人— 陣内秀信 法政大学

		橋 爪 紳 也	京都精華大学
		結 城 登 美 雄	まちづくりプランナー
		森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰
	司 会	陣 内 秀 信	法政大学
第 132 回	江戸歌舞伎の特色	服 部 幸 雄	日本女子大学

【1999年(一般公開フォーラム)】

第 133 回	東京・明治大正の人口問題	小 木 新 造	江戸東京博物館
第 134 回	江戸東京フォーラムと住総研 伝統的な履歴書	大 坪 昭	住宅総合研究財団墨壺 吉 田 良 太 住宅総合研究財団
第 135 回	「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—	川 田 順 造	広島市立大学
第 136 回	都市と農村の蜜月時代—近郊農業の展開と流通の変化—	江 波 戸 昭	明治大学
第 137 回	永井荷風と東京	湯 川 説 子	江戸東京博物館
第 138 回	地域雑誌からみた町	立 壁 正 子	『ここは牛込、神楽坂』 野 口 由 紀 子 『武蔵野から』 大 野 順 子 町雑誌『千住』
		司 会 森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰

【2000年(一般公開フォーラム)】

第 139 回	「ニュースの誕生」展と江戸東京学	木 下 直 之	東大総合研究博物館
		北 原 糸 子	東大社会情報研究所
		佐 藤 健 二	東京大学
		吉 見 俊 哉	東大社会情報研究所
		富 澤 達 三	神大常民文化研究所
第 140 回	長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」	西 和 夫	神奈川大学
		千 野 香 織	学習院大学
		波 多 野 純	日本工業大学
第 141 回	☆大久保にみる都市の国際化	稲 葉 佳 子	(有)ジオ・プランニング
第 142 回	☆神田多町—震災復興の「まち」から見えるもの—	小 藤 田 正 夫	千代田区まちづく公社
第 143 回	築地・横浜の外国人コミュニティ	森 田 朋 子	お茶の水女子大学
第 144 回	江戸東京フォーラムの果たした役割	太 田 博 太 郎	日本学士院
		小 木 新 造	江戸東京博物館
		陣 内 秀 信	法政大学
第 145 回	遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—	波 多 野 純	日本工業大学
		後 藤 宏 樹	千代田区四番町資料館
		栩 木 真	新宿歴史博物館
		司 会 小 林 克	江戸東京博物館

【2001年(一般公開フォーラム)】

第 146 回	江戸の見世物	川 添 裕	見世物文化研究所
第 147 回	☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み	所 理 喜 夫	足立区立郷土博物館
		荒 居 康 明	町並み研究家
		波 多 野 純	日本工業大学
		大 野 順 子	町雑誌『千住』
第 148 回	祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成—神田祭りを主な素材として—		

		田 中 優 子	法政大学
		司 会 内 田 雄 造	東洋大学
第 101 回	都市の民俗学—色・音・匂の変化—	小 林 忠 雄	歴史民俗博物館

【1996年(公開研究フォーラム)】

第 102 回	同潤会柳島アパートの生活	大 月 敏 雄	東京大学
第 103 回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について	佐 藤 滋	早稲田大学
第 104 回	住文化の体験の場としての博物館	小 澤 紀 美 子	東京学芸大学
第 105 回	縁切寺—東慶寺と満徳寺—	高 木 侃	関東短期大学
第 106 回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小 林 克	歴史文化財団
第 107 回	日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の2つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—	平 井 聖	昭和女子大学
第 108 回	震災復興〈大銀座〉の街並みから	石 川 幸 恵	清水建設(株)
第 109 回	明治初年の大火と貧富分離論	石 田 頼 房	工学院大学
第 110 回	戦災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—	越 沢 明	長岡造形大学
第 111 回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤 岡 洋 保	東京工業大学
第 112 回	カフェーと喫茶店	初 田 亨	工学院大学

【1997年(公開研究フォーラム)】

第 113 回	橋のアーバン・デザイン	伊 東 孝	日本大学
第 114 回	城下町大坂、江戸の都市設計	篠 原 修	東京大学
第 115 回	東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—	布 施 六 郎	東京都
第 116 回	江戸・東京の湯屋	松 平 誠	女子栄養大学
第 117 回	江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容—	米 田 雅 子	
第 118 回	江戸藩邸物語	加 藤 貴	
第 119 回	建築家、佐藤功一と都市への視線	米 山 勇	江戸東京博物館
第 120 回	明治の歌謡にみる東京	大 串 夏 身	昭和女子大短大
第 121 回	「江戸名所図会」と長谷川雪旦	鈴 木 章 生	江戸東京博物館
第 122 回	町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—	波 多 野 純	日本工業大学
第 123 回	参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—	原 史 彦	江戸東京博物館

【1998年(公開研究フォーラム)】

第 124 回	寛永 13 年江戸城外堀普請と周辺地域の変化	栩 木 真	新宿歴史博物館
第 125 回	関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて—	藤 沢 靖 介	部落解放研究所
第 126 回	明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から—	友 常 勉	部落解放研究所
第 127 回	関東大震災と朝鮮人虐殺事件	石 田 貞	埼玉同和教育協
第 128 回	原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—	柳 瀬 有 志	法政大学
第 129 回	横浜市の市営住宅事業について	水 沼 淑 子	関東学院女子短大
第 130 回	目白文化村とその変貌	八 木 澤 壮 一	東京電機大学

【1998年(一般公開フォーラム)】

第 131 回	地域学の明日を考える	小 木 新 造	江戸東京博物館
---------	------------	---------	---------

コメンテータ 西澤泰彦 名古屋大学

2004年(一般公開フォーラム)

- 第162回 音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉 秋山宏 日本大学
第163回 江戸東京に於けるスラムの発生と変容 内田雄造 東洋大学
第164回 ☆銀座の歴史と都市文化を考える 加藤貴 早稲田大学
第165回 よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて— 岡本哲志 岡本都市建築研究所
基調報告 谷川章雄 早稲田大学
波多野純 日本工業大学
事例報告 後藤宏樹 千代田区四番町資料館
佐藤攻 東京都埋蔵文化財センター
松尾信裕 大阪市文化財協会
扇浦正義 長崎県都市整備推進課
司会 小林克 江戸東京博物館

2005年(一般公開フォーラム)

- 第166回 江戸の養生所 安藤優一郎 江戸・都市史研究家
コメンテータ 勝木祐仁 文化女子大学
第167回 再考—小木新造の江戸東京学— 陣内秀信 法政大学
パネリスト 波多野純 日本工業大学
内田雄造 東洋大学
吉見俊哉 東京大学
横山泰子 法政大学
司会 小澤弘 江戸東京博物館
第168回 ☆水上から江戸東京をみる—品川の水辺と宿場— 陣内秀信 法政大学
波多野純 日本工業大学
第169回 ☆下北沢の魅力—日本型都市再生のあり方を探る— パネリスト 小林正美 明治大学
大木雄高 ジャズ・バー Lady Jane
吉見俊哉 東京大学
司会 陣内秀信 法政大学

2006年(一般公開フォーラム)

- 第170回 東京エコシティ—新たなる水の都市へ— 岡本哲志 岡本哲志都市建築研究所
ロドリック・ウィルソン 法大エコ地域デザイン研究所
石川初 ランドスケープ・アーキテクト
田島則行 建築家・テレデザイン
渡辺真理 建築家・法政大学
久野紀光 建築家・東京工業大学
パネリスト 猪野忍 建築家・法政大学
小林博人 建築家・慶応大学
司会 陣内秀信 法政大学
第171回 大阪くらしの今昔館—「体感する」博物館活動— 谷直樹 住まいのミュージアム
司会・コメンテータ 小澤弘 江戸東京博物館
第172回 日本の町家—京町家と卯建の意味— 大場修 京都府立大学

- 伊藤裕久 東京理科大学
第149回 江戸の女性と布橋灌頂会—立山博物館の試み— 鳥越けい子 聖心女子大学
米原寛 立山博物館
第150回 都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から— 波多野純 日本工業大学
初田亨 工学院大学
大月敏雄 東京理科大学
森まゆみ 作家・「谷根千」主宰
東孝光 建築家・千葉工大
司会 陣内秀信 法政大学

2002年(一般公開フォーラム)

- 第151回 モダン都市・東京の読書空間—読書装置の1920～30年代— 永嶺重敏 東大資料編纂所
佐藤健二 東京大学
第152回 近代皇族邸宅にみる和風と洋風 水沼淑子 関東学院大学
小沢朝江 東海大学
第153回 江戸と怪談と怪異空間 内田忠賢 お茶の水女子大学
コメンテータ・司会 横山泰子 法政大学
第154回 ☆向島の成立と下町気質 佐原滋元 向島百花園茶亭さはら
第155回 関一と近代大阪の再創造 ジェフリー・ヘインズ オレゴン大学
コメンテータ 石田頼房 東京都立大学
内田雄造 東洋大学
通訳 ビュスト 東京大学

2003年(一般公開フォーラム)

- 第156回 大江戸八百八町と日本橋界限—『熙代勝覧』の世界—
コメンテータ 波多野純 日本工業大学
森まゆみ 作家・「谷根千」主宰
竹内誠 江戸東京博物館
市川寛明 江戸東京博物館
コーディネータ 小澤弘 江戸東京博物館
第157回 もう一つの東京の近代住宅史：私論 山口廣 日本大学
第158回 江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー— 基調講演 全相運 韓国科学技術翰林院
コメンテータ 川田順造 神奈川大学
高田誠二 北海道大学
中村士 国立天文台
橋本毅彦 東京大学
波多野純 日本工業大学
渡邊晶 竹中大工道具館
コーディネータ 小澤弘 江戸東京博物館
鈴木一義 国立科学博物館
第159回 ☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」 堀江亨 日本大学
松山薫 東北公益文科大学
高橋幹夫 文化誌研究者
第160回 幻燈から映画へ—転換期の映像メディア— 岩本憲児 早稲田大学
第161回 都市への記憶：「満州国」建築へのまなざし 古賀由起子 コロンビア大学

開催案内

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年3～4回開催しています。
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL = <http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

発刊物など

研究論文・報告

- ①「江戸東京、生活空間の研究」研究所報No.14/A4判19ページ/住宅総合研究財団/1988
- ②「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7) 研究年報No.18～24/A4判51ページ/
住宅総合研究財団/1992～1998
- ③「『江戸東京』時代の生活と政治」小木新造/A5判92ページ/住宅総合研究財団/2005.8

一般書籍

- ①「江戸東京を読む」A5判295ページ/筑摩書房/1991
- ②「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」B6判290ページ/日本放送出版協会/1995
- ③「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」B6判282ページ/日本放送出版協会/1995
- ④「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」B6判273ページ/日本放送出版協会/1996
- ⑤「江戸東京学」小木新造/A5判225ページ/都市出版/2005

記録小冊子

- ①「地域学の明日を考える」B5判59ページ/住宅総合研究財団/1999
- ②「地域雑誌からみた町」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2000
- ③「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2001
- ④「都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—」B5判44ページ/住宅総合研究財団/2002
- ⑤「江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—」B5判55ページ、カラー/
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班/住宅総合研究財団/国立科学博物館/
東京都江戸東京博物館/2004
- ⑥「よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—」B5判42ページ/住宅総合研究財団/2005
- ⑦「東京エコシティ—新たなる水の都市へ—」B5判46ページ/住宅総合研究財団/2006
- ⑧「都と京—東京と京都の人と暮らし—」B5判40ページ/住宅総合研究財団/2007
- ⑨「地域資料としての『近代建築』」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑩「巣鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巣鴨地域—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑪「杉田玄白と小塚原の仕置場」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑫「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑬「幻の日本万国博覧会—月島の地域学—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑭「川越のまちづくりと歴史的建造物の活用」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009

住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」のページ

司 会 波 多 野 純 日本工業大学

2007年(一般公開フォーラム)

- 第173回 ☆杉田玄白と小塚原の仕置場 ————— 野 尻 か お る 荒川ふるさと文化館
亀 川 泰 照 荒川ふるさと文化館
コメンテータ 土 居 浩 ものつくり大学
司 会 小 林 克 東京都写真美術館
- 第174回 ☆地域資料としての『近代建築』 ————— 川 口 明 代 文京ふるさと歴史館
北 田 建 二 文京ふるさと歴史館
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
- 第175回 ^{みやこ みやこ} 都と京—東京と京都の人と暮らし— ————— 酒 井 順 子 『都と京』著者
陣 内 秀 信 法政大学
司 会 横 山 泰 子 法政大学
- 第176回 巣鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巣鴨地域— ——— 秋 山 伸 一 豊島区立郷土資料館
成 田 涼 子 豊島区教育委員会
高 尾 善 希 東京都公文書館
市 川 寛 明 江戸東京博物館
岩 淵 令 治 国立歴史民俗博物館
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団
- 第177回 発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性 ————— 谷 田 有 史 たばこと塩の博物館
毎 田 佳 奈 子 港区教育委員会
水 本 和 美 四番町歴史民俗資料館
仲 光 克 顕 中央区教育委員会
波 多 野 純 日本工業大学
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団

2008年(一般公開フォーラム)

- 第178回 チャレンジCGプロジェクト「江戸の町並みをつくる」— 高 橋 時 市 郎 東京電機大学
勝 村 大 東京電機大学
小 澤 弘 江戸東京博物館
波 多 野 純 日本工業大学
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
- 第179回 幻の日本万国博覧会—月島の地域学— ————— 増 山 一 成 中央区教育委員会
伊 東 孝 日本大学
コメンテータ 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 吉 見 俊 哉 東京大学
- 第180回 ☆川越のまちづくりと歴史的建造物の活用 ————— 内 田 雄 造 東洋大学
荒 牧 澄 多 NPO川越蔵の会
藤 井 美 登 利 川越むかし工房
コメンテータ 森 ま ゆ み 谷根千工房
司 会 陣 内 秀 信 法政大学

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつくられます。委員は、現在、下記の通りです。主な参加者は、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等に関心ある方で、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京の個性を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市に関心を持つ人たちが、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の基盤を持つこと、すなわち、学際的に展開をすることです。このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを考えます。

フォーラムは、企画の基本柱に基づいて立案を

しています。その基本柱は、①「記憶」としての都市を考察する、②「地域研究」を掘り下げる、③環境と都市の関係を歴史的視点で考察する、の3つです。

21世紀は「都市の時代」です。全世界の人口の大半が都市に住むという、地球規模での都市化が進みつつあります。その反面、環境破壊が今日の大きな問題として浮上しました。都市景観が個性を失い、画一化していることも気になります。

そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究と、その成果の市民への還元に取り組みます。

フォーラム委員

委員長

陣内 秀信 法政大学デザイン工学部建築学科

委員(50音順)

稲葉 佳子 法政大学大学院工学研究科

入江 彰昭 東京農業大学短期大学部環境緑地学科

小沢 朝江 東海大学工学部建築学科

小澤 弘 (財)東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館

小林 克 (財)東京都歴史文化財団

波多野 純 日本工業大学生活環境デザイン学科

森まゆみ 作家

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環

幻の日本万国博覧会

一月島の地域学—

2009年12月1日発行 ©

編集 住総研江戸東京フォーラム委員会

協力 タイムドーム明石
(中央区立郷土天文館)

校正+DTP 有限会社 メディア・デザイン研究所

発行人 岡本宏

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel.03-3484-5381 Fax.03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

住宅総合研究財団について

当財団は1948(昭和23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期、これに憂慮した故清水康雄(当時清水建設社長)の提唱により、東京都の許可を得て設立された公益法人です。

住生活に貢献しうる研究の委託・助成事業を中心に、「住」をめぐるフォーラムの開催、機関誌『すまいるん』の発行等、学問と実践をつなぐ普及活動を行っています。また、「住」に関する専門図書室を公開しています。

2008年の創立60年を機会に、研究成果の市民への還元とともに、市民に学び場を提供する公益法人として社会貢献を果たす所存です。